心理臨床家のプロフェッションの生成と継承Ⅱ[1]

――唯一無二の人生・体験への尊び――

深瀬裕子・岡本祐子・上手由香・奥田紗史美・前盛ひとみ・神谷真由美

Generativity of professional identity in clinical psychologist Ⅱ:
Respect the only life and experience

Yuko Fukase, Yuko Okamoto, Yuka Kamite, Satomi Okuda, Hitomi Maemori, and Mayumi Koya

心理臨床の世界は，伝え手と受け手，そしてその間や周りの人々が複雑に関わる領域である。この領域において，専門性の生成や後進への世代継承はどのように行われているのだろうか。本研究では心理臨床家である上智大学大学院教授の黒川由紀子先生に，専門性の生成と世代継承に関する面接調査を行う機会を得た。面接調査から，黒川先生の専門性の生成と継承には，①自らの未熟さに向き合い続ける姿勢，②変化を続ける内的な恩師との関係とそこから受ける薫陶，③後進の自己一致を促そうとする意識が特質として認められた。最後に，本研究の面接調査が，世代継承という特徴も備えていることから，後進である筆者の中に生じた世代継承について考察した。

キーワード：世代継承性，アイデンティティ，専門性，臨床心理士，相互循環

問題と目的

世代を超えて何かを受け継ぎ，また次の世代に継いでいく営みは，次世代を育てケアしていく働きであるとともに，新しいものを生成しつづけるいきいきとした働きでもある (やまだ，2012)。では，心理臨床家は，自分の専門性を後進にどのように伝え，あるいは伝えようとしているのか。その形から言えば，スーパーヴィジョン (個人・集団)，個人的な教示，講演や書籍などがある。特にスーパーヴァイザーとしてスーパーヴァイジーにいかに技術を伝え，身につかせるかについては多くの書籍が出版されている。しかし本研究では，その形や方法ではなく，心理臨床家が後進に伝えたいもの，その時に大事にしていること，そしてより広く，後進との関係をどのように考えているかを明らかにしようとするものである。

例えば，臨床心理士である倉永 (2010) は，スーパーヴァイザーという立場から，“スーパーヴァイジーのその人らしさ，持ち味，個性，治療者としての力などを理解し，引き出すこと” を目指し，

[1]本研究は，2009-2012 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」（課題番号 21530691，研究代表者 岡本祐子）の一部として行われた。

そのために初回にスーパーヴァイジーにインテークをすると述べている。また，初学者用として著名な書籍の著者である田中 (2002) は，本書の冒頭で，心理臨床の知識や技法を書物や授業を通して学んだ学生でも，実際のケースでは，このようなわかった気になっているものでは太刀打ちできないという，言わば実務と理論の間の断層に，“小さな踏み台をつけよう” として本書を出版すると記している。心理臨床の世界の独自性は，伝え手と受け手の間にあるものが人間であり，技術と知識だけではどうにもならないことが挙げられよう。この，人々が複雑に関わる心理臨床という領域において，世代継承はどのように行われているのだろうか。

本研究では，心理臨床家である上智大学大学院教授の黒川由紀子先生に，専門性の生成と継承というテーマでインタビューをする機会を得た。黒川先生は，わが国の高齢者心理臨床を担う一人であり，特に，慶成会青梅慶友病院 (「自分の親を安心して預けられる施設をつくる」をコンセプトに，1980 年に設立された高齢者専門の病院である) などにおける臨床実践から，認知症者の回想法を日本に広めた人物として知られる。聞き手である筆者は，調査当時は大学院生であり，高齢者心理臨床の初についてばかりであった。黒川先生のご著書 (黒川・斎藤・松田, 2005) の冒頭に書かれていた “アルツハイマー病やうつ病など心の病や問題に苦しむ患者さんや家族の心を，「やさしさ」や「情熱」ばかりではなく，一定の「技術」をもっていかに支えることができるか” という一文を心の拠り所としており，この度の面接調査をお願いした。

方　法

語り手

黒川由紀子先生 (保健学博士，臨床心理士) は，調査当時 55 歳の上智大学大学院教授であった。1956 年に東京で生まれ，1979 年に東京大学教育学部心理学科を卒業後，上智大学大学院に入学された。1993 年から東京大学医学部精神医学教室に，1998 年から青梅慶友病院にも勤められ，1998 年には慶成会老年学研究所 (高齢社会に関する臨床活動，研究活動及び教育・研修活動を 3 本の柱として活動する研究所) を立ち上げられる。2001 年から大正大学の特任教授を勤められた後，2005 年より現職である。

面接場所と質問項目

2011 年に，上智大学にある黒川先生の研究室にて，1 対 1 の半構造化面接を行った。質問項目の大枠は，一連の研究と同様に次の 3 点であったが，比較的緩やかな構造で面接を行った。①専門世界への関心はいつ，どのように芽生えたのか，②専門的訓練の始まりから自立に至るプロセスとそれぞれの感覚，③身につけた専門性を後進に伝えていくための視点とその実践。

調査回数は 1 回，2 時間弱であった。なお，話し手と聞き手は初対面であった。事前に研究概要と質問項目をご説明し，調査協力への承諾をいただいた。また，面接調査の前に，論文による公表を予定していることを伝え，その際の実名・匿名表記等については後日ご相談することとなった。面接内容は，許可を得て IC レコーダーで録音した。

結果の記述

録音データから逐語記録を作成し，専門性の生成プロセス，専門性の継承の順に整理して記述した。また，黒川先生のご著書 (Freed, 1992 黒川他訳 1998; 黒田・井上・加瀬・黒川・古瀬, 1994; 黒川, 1998, 2002, 2005, 2008; 黒川他, 2005) から客観的事実を補足した。その後，黒川先生に原稿をお送りし，修正していただいた。この時，実名での掲載についてもご了解いただいた。

結果と考察

1. 専門性の生成プロセス——異文化に自分を位置づける

東京大学入学時には国際関係論に関心を持たれていた黒川先生であったが，大学 2 年時の進学振り分けの際に「直観的に」「面白いかなって思って」心理学を選ばれた。意識的に心理学に興味を持ち，心理学の道を選ばれたが，この頃は心理学の世界で生きていくとは考えておられなかったそうである。

さて，当時の東京大学には臨床心理学の教官として佐治守夫先生がおられ，佐治先生の元で黒川先生は臨床の初を学ばれた。そして卒業論文で高齢者を対象とした研究を行われた。高齢期心理臨床という領域は，現在もそうであるが，それほど多くの学生が選択する領域ではない。黒川先生は高齢者の研究を行った理由を次のように話された。

「同級生はほとんど子どもとか青年期をテーマとしていました。何かこう，やりつくされた感があって。まあ，それほどでもないと思うんですけど。自分は，あまりにも老年期の研究が少ないのと，人がどういう風に成長，発達していくのかということについて，人生全体をみないと分からないことが沢山あると思って。ごく普通に年を重ねて，長い経験のある人に会ったり触れたりしたいなっていう思いもありましたね。人と同じ事はやりたくないという気持ちもありました」。

東京大学卒業後，黒川先生は高齢期心理学を研究されていた霜山徳爾先生のおられる上智大学大学院に進学される。大学院入学時には，高齢者への関心はあったが，臨床的に高齢者のみに関わりたいとは思われていなかったそうである。大学院入学後に，学生相談や病院で臨床活動を行う中で，次第に様々な専門性を深めつつ，高齢期心理臨床に「気づいたらかなりどっぷりはまっていた」と話される。このプロセスは，黒川先生ご自身の選択だけでなく，他の先生との関わりからもたらされた，「ご縁」によるものでもあると言われる。例えば，卒業論文時の指導教官だった佐治先生の言葉が，修士論文につながるというエピソードをお話し下さった。

「卒業論文の諮問の時に，佐治先生から，『あなたは高齢者の創造性についてどう思いますか？』って聞かれて。その時驚いたんですけど，私は高齢者のクリエイティビティに潜在的関心があるんだなって，賦活された。それで修士論文を，創造的な高齢者へのインタビューとロ

ールシャッハテストというテーマにしたんですね」。

このように，ご自分の関心や課題に向き合い，考えながら過ごされていた。それは 20 代から 10 年以上続いたそうである。例えば，臨床活動についても，ご自身で「勉強病」と言われるように，足りないところを見つめ，ロールシャッハテストだけで 3 名のスーパーヴァイザーに付き，土居健郎先生，神田橋條治先生の研修会にも長期にわたり参加されていた。

このような大学院在学中に，当時ボストン大学社会福祉学部教授のアン・フリード先生と回想法に出会われる。始まりは，ある方から「日本の高齢者を対象に面接調査をしているアメリカ人の先生 (フリード先生) の通訳等の手伝いをしてほしい」と頼まれたことだった。当時，子育てが忙しく，その役割が果たせるか不安もあったが，「これはやるしかないという強い思いがあり，やれる範囲でお手伝いしたい」と，フリード先生の多くの面接に通訳等の研究助手として立ち会われた。そしてこの時，黒川先生は初めて回想法に出会われ，長い人生を歩んできた方の人生の物語を聞くことの意味やその重要性を感じられた。また，フリード先生は都度，黒川先生に，「あなたはどう思うか」と問われるので，英語で自分の考えを述べる必要があった。ご自分の思いや考えを英語に変えてディスカッションする体験は，苦しくもありながら，大きな糧であると黒川先生は話される。フリード先生は黒川先生の臨床家としての資質を高く評価されたのである。

「英語がそんなに流暢に話せるわけではなかったので，自分の思いや考えを，違う言葉でディスカッションするのはすごく苦しかったんです。でも，それは多分語学だけの問題ではなくて，日本語だとごまかしがきいてしまうようなところでも，英語だとよほどクリアにしないと伝わらない。思考の訓練にもなったと思います。すぐれた臨床家は，たどたどしい英語でも，コンテンツをキャッチする能力が高いんですよね」。

これを機に，野村豊子先生やフリード先生たちと回想法に関する検討を重ね，病院や老人ホーム等で実践を始められる。回想法の魅力を次のように話される。

「面接に対して否定的だったり拒否的だったり抵抗のある方が，面接を進めるに従って，生き生きと自分の人生を語り振り返り，変化を示す。その様子を見て，年配の方の人生の来し方に，あまり敬意が払われてなかったり，小難しく分析されすぎている気がして。そうではなくて，本人の育んできた力を活かす回想法は意味があると実感した。特別なことをしてきた訳ではない方でも，唯一無二の人生を歩んできた力の大きさ」。

そして，当時ミシガン大学ターナー老人医療クリニックのソーシャルワーク部長だったルース・キャンベル先生とも出会われる。この出会いから，その後 20 年もの間，毎夏ミシガンで多職種による老年学セミナーのプログラムコーディネーターを務められるなど，黒川先生が専門性を考える大きな機会となった。

「異文化の中で，自分の専門性が見えてくる。日本で『日本』って考えてても，臨床心理士だけの中で臨床心理士のことを考えてても，限界がある。アメリカっていう異文化，他職種の中に身を置いて，その中で切磋琢磨する機会があったことは一つの大きな転機でした。今でもルースとは公私とも親しく，共同研究もしてますし，家族同士でも付き合っています」。

さて，この一連の専門性の形成プロセスに，大学院の指導教員であった霜山先生はどのように関連するのか。黒川先生は，言葉で表現しきれるものではないと言われる。

「(霜山先生から教わったことは？) 霜山先生は，何かの言葉の一つって言うよりは，先生自身の仕事や臨床に向かう姿勢。このことっていう風には言い難いんです。…先生はいつも授業を祈りで始めて祈りで終えてらしたんですね。ご自分が特攻隊で多くの友人が亡くなって，自分は生き延びている，戦争を体験された先生の悲しみ，それに基づく臨床観が，授業の中で伝わってきました。何故祈りで始めて祈りで終えるのか…。手を合わせて授業を始められるんですけど。今自分が大学の教員になってみて，当時の先生の想いが，あの頃よりは分かるような気がします。自分も心の中で常に手を合わせている感覚があります。根本的なところで強い影響を受けた」。

そして上智大学大学院を満期退学後，東京大学の精神医学教室や青梅慶友病院にて臨床と研究を行ってこられた。

当時の東京大学病院は，老年精神医学の松下正明先生，斎藤正彦先生を始め，老年期を専門とする先生が多くおられた時であった。朝 7 時から勉強会が開かれ，そこで受けた薫陶も大きかったと話される。そこで黒川先生は，精神医学的視点や，臨床心理士である自分の役割を考え続けた。

また，同時期に非常勤で勤められた青梅慶友病院では，高齢者に特化した関わりを始められる。併せて，医師，看護師だけでなくレクレーションワーカーや作業療法士，ソーシャルワーカーといった多職種と共に働く経験も重ねられた。そこでは勉強会を開きながら，グループでの回想法や，個別の心理面接を実践された。大学病院は枠がしっかりしたところであるが，老人病院は生活の場であるため，お茶を飲んでいる患者さんの横に座って話しながら専門性を発揮することが求められた。その中で，大学病院とは違った経験をし，新しい発見があったと話される。

「決められた，従来の枠に対する疑問をいつも思っていたので。揺れながらも新しい可能性にチャレンジして行きたいなっていうのが強かったと思います。老人病院ではむしろ新しいことを新しい人とできるっていう。そこがすごく嬉しかった。(中略) 他の専門職との出会いもとても良いものでした。常にクリアしなければならない課題にぶつかる。心理士は私一人で。それも非常勤で。東大病院に行きながら行っていたので。『心理って何？』って問われるところから始まる。勉強会を開きながら，自分の専門性を発揮しつつ，相手の専門領域は相手から学ぶ，

そういう良い循環が出来た。色んな議論を重ねながら少しずつ進めて行った。最初の回想法を開くまで，半年勉強会をして行ったんで」。

青梅慶友病院に勤める中で，慶成会老年学研究所を立ち上げられる。当時は「高齢者にかなり特化して，毎日仕事をしていた」。その後，黒川先生の尊敬する村瀬嘉代子先生から「ご縁」をいただき，大正大学で特任教授をされた後，上智大学の専任教授となって現在に至っておられる。大正大学では夜間の大学院を担当されていたため，臨床とは「半々くらいのバランスで」やっておられたが，上智大学の教授になられてからは，大学の比重がさらに増える。「そのことについては，色々考えます」と話されるが，臨床現場を中心に育まれたご自身の専門性のプロセスについて，このように振り返られる。

「こんな私が臨床心理の仕事をし続けていいのかしらって，大学院生の頃から，慶友病院に勤める前までは思ってたところがありましたけど，今はそういう，軸が根本的にぐらぐらすることはないですね。若い時は未知の世界の広さにも気づいていないっていうか。専門性を磨くことに懸命じゃないですか。今でこそ，色んな世界の方とお会いすることが多いですけど。閉じて閉じて，専門を深めて，余計なことは見ない，しないっていう時期も長かった。今はある種の軸が出来た上で，もう少し広い世界と交流を深め，循環をさせていきたいと考えています。年配の方と比べると，自分はまだまだ若く，未熟で，何も知らないっていう立ち位置に常に居続けますよね。自分はまだ途上の人間で，今でも，先輩から伝授されたこと全てを吸収できているわけではない。それを問いなおしたり，古い本を読みなおしては新たな気づきがあります」。

2. 専門性の継承——循環して広がる世界

では，先生はこのような専門性を後進にどのように伝えてこられたのか，あるいはどのように伝えようとされているのか。

第一には青梅慶友病院や慶成会老年学研究所などの同僚の臨床心理士との関わりだと話される。大学生の研修生，そしてその中から常勤の臨床心理士として入った方，黒川先生のゼミ生などが同僚として勤められた。それは，「相当密にかなり厳しいこともがんがん言いながらやってきた」関係であった。後輩にあたる臨床心理士に，何をどのように伝えたのだろうか。

「何を伝えるか…。なかなか一言で言うのは難しいですよね。一緒に仕事をする場面が一番ですよね。一緒に仕事をしてきた人に仕事を渡すっていうことなので。一緒にグループをしたりディスカッションをする中で，つないできた。結構時間をかけて，個々のケースについても色んなディスカッションをしたり，疑問を話しあったり。スーパーヴィジョンを定期的にしたり」。

そして大学に移ってからは，学生，特に大学院の学生との間で交流が密となる。40 代のころの黒

川先生は，「多少経験積んできて，私にはこういうものがあって，これは何か意味があるものだぞ」という思いが強かったそうである。後輩や学生に対して「権威的」に「こうでしょ，ああでしょう，駄目じゃない」と言ったこともあると話される。

しかしその感覚が徐々に薄らぎ，今は継承というより，相互循環だと話される。そして相互循環で広がる世界や，分かっていないこともまだまだ沢山ある，未知の世界があるという感覚が必要と言われる。

「段々，私はそれなりにやってきたかもしれないけど，これが全てじゃない，未知のことも多いという感覚が強まった。正しいものを私が持っていて，それを渡しますっていう感覚はどんどん薄らいで行く。アイデンティティはいつでも更新し続けるもの。循環させていくことが，大事だと思う。これが確立されたから，あなた (後進) に渡しますっていうものではないと思うんです。若い子は若い子で，私の持たないものを持っているわけで，それと循環させて行かないと駄目。私の学生と話している時でも，ある部分では私の方が経験がある。でも今ここでこの瞬間に，現場で色んな体験をしている学生や若手臨床心理士の体験も，唯一無二固有のもの。その唯一無二で固有なものをキャッチするように，絶えず努めていないと，『こうでしょ』っていうのではちょっと違ってきてしまう。だから学生の今の体験が私の中で，私の身体をくぐってもう一度出て行くっていうイメージ。(中略) そうじゃないと終わってしまう」。

後進に伝える，あるいは求めたり伝えたい専門性について，黒川先生は技術や形だけでなく，柔軟性や姿勢でもあると語られた。検査や面接といった専門的なツールや技術は，深め，数をこなす必要があり，レポートの書き方も洗練させていかなければならないが，心理臨床では患者やクライエントを中心にしたネットワークの中にある。黒川先生はこのネットワークの方達ときちんと付き合える柔軟性が大事だと考えておられる。この柔軟な専門性について，次のように話された。

「同じ専門性を後進に伝えていく上でも，より広い世界の中で専門性を位置付けることがすごく大事だと思っています。たまたま老年期の臨床をやる人は，色々な職種の人と働くことが多い。そうすると，臨床心理士だけで閉じられた世界というよりは，もうちょっと違う中での立ち位置を見いだしたり，新しい枠組みを作って行く姿勢が求められる。そういうのがどうしても必要になってくる面があると思うんですね。そういう時に，頑なになるのではなく，柔軟に仕事をしていけるように育っていってほしいなと思います。こうした柔軟性は子どもの心理臨床にも求められるもので，村瀬先生に学ぶことは大きかったと思います。(中略) 専門性の狭いところを深めていくっていう方向性と，広げていく方向性と，両方を持つことが大事だと思う。そうでないと，なかなかこの分野の仕事は広がっていかないなと思うんです。チャレンジングでもあるし。自分の学生も結構苦労したりもしてますけど。新しい職域は広がってきている。高齢者領域で，今まで臨床心理士がいなかった内科のチームに臨床心理士が欲しいと求められて，行く。試行錯誤ですよね，お互いに。その時に，めげずに，柔軟に広げたり狭めたり

しながら，共同で仕事をしていくということが大事だと思うんです」。

黒川先生は，高齢者が歩む唯一無二の人生を尊び，ご自分の専門性を深め続けてこられた。そして，先生の専門性を生成するプロセスは，ご自身の未熟さや不完全さを見続けることとも考えられる。青梅慶友病院に勤められ，慶成会老年学研究所を設立された頃には，ご自分の専門性の確かさを実感された時期だと思われる。後進である同僚の臨床心理士や学生に，やや一方的にご自分の正しい知識・体験を伝えようとされてもいた。しかし徐々に，「確かさ」を盾にご自分の専門性を守るのではなく，後進の唯一無二の体験をキャッチし，相互循環的にお互いを変化させ，未知の世界を見ようとすることに変化していかれた。

総合考察

1. 専門性，教え，継承に答えを出さないこと

本研究は，心理臨床家のプロフェッションの生成と継承という研究テーマのもと，専門性を深める過程，恩師から教わったこと，後進への専門性の継承について明らかにすることを当初の目的として行った。しかし，黒川先生はいずれのテーマについても，一筋の道として，あるいは確固たる方法として語ることはされなかった。むしろ，そのように断定することを避けておられたように感じられる。

未熟さから目を逸らさないこと　黒川先生の専門性の生成過程には，常に，ご自身の未熟な部分から目を逸らさない姿勢があるように思われる。しかし，青年期から成人初期にかけての，ご自分に足りないものを埋めるように専門性を深める過程と異なり，40 代を過ぎてからの「未知の世界のことも多いという感覚が強まった」と話される表情は，どこか楽しそうであった。黒川先生のようにキャリアを築いた専門家にとって，自らの未熟さに向き合い続けるには，未熟さを忘れずにいようとする能動的な姿勢と，恥ずかしさに耐える度量が求められるように感じられる。これらをクリアにするには，自分自身とその専門性への確かな手ごたえと，新しい体験をすることへの絶え間ない好奇心があるのだと思われた。

変化し続ける恩師との関係　佐治先生や霜山先生といった恩師との関係を話される時にも,「恩師からこれこれを教わった」とは表現されなかった。そして今でも書籍等を読み返して，あるいはその姿を思い出して，薫陶を受け続けていると話された。恩師からの教示は終わりのない行為であるとも言える。なぜならば，時と共に恩師との関係も変化しているからである。例えば，祈りで講義を始め，祈りで講義を終えられた霜山先生の姿は，大学院生で専門性の深化に没頭していた黒川先生には畏敬であり，暖かくどっしりと見守る存在であったかもしれない。大学院を終え，心理臨床の現場で同僚たちと切磋琢磨していた黒川先生にとっては,祈る霜山先生の姿を思い起こすことが,心理臨床の中に哀しみや慈しみを感じる土台になっていたかもしれない。そして大学教授になり，同じく講義をする立場になった現在では，これからの世を担う学生たちへの希望と，忘れられない哀しみを湛えておられるのかもしれない。つまり，黒川先生が人生を歩み，変化を続けているのと

同じく，恩師と交わした言葉，恩師から受ける薫陶も変化していると思われる。したがって，恩師から受ける言葉や薫陶は，時が経っても新鮮な薫陶であり，内的な恩師との関係は完結しないと言える。

答えを出さない世代継承　本研究で最も重心を置いていた世代継承についても，渡したもの，渡す相手，渡したいことを，はっきりと言葉にはされなかった。むしろ，後輩臨床心理士や学生が，これから生きる場所や周囲の人々とうまくかかわれるような働きかけが目指されていた。このような, その人自身の自己一致を進めるような働きは心理臨床家である倉永 (2010) や田中 (2002) の姿勢にも見られ，心理臨床家に特徴的なものと思われる。特に心理臨床の世界における継承は，伝え手と受け手の他，周囲には多くの人々がおり，彼らが複雑に絡みながら中心にいる人間 (クライエント) の自己表現を見つめ続けるのである。つまり，心理臨床という「個人の個人らしさや表現」を大切にする領域において「与え手から受け手への伝授」という単純な図式は成立しえないのかもしれない。

2. 世代継承の場における聞き手の体験

物語りは他者を「私」にかかわらせる行為,「私の世界」に巻き込む行為，コミュニケーションによる「共同行為」であり，このうちのどの領域を重視するかによって問いの立て方が変わる (やまだ, 2000)。このインタビューは，先人 (黒川先生) が次世代 (聞き手である筆者) を相手に専門性を語ったもので，世代継承という特徴も備えている。そこで，この研究で後進である筆者の中に生じた世代継承について考察したい。

聞き手は当時, 老人保健施設で臨床活動を行って 4 年目であった。衰弱の一途をたどる高齢者が，それでもなお，そしてそれだからこそ一生懸命に生きようとする姿を，そばで見守ることも臨床活動だと理解しているつもりであった。だが一方で，時間と場所を構造化せず，目に見える肯定的な変化を目標にもしがたいこのスタイルを，重要な何かが欠けたものとも感じていた。しかし，この葛藤に目を向ける勇気はなく，心の隅に追いやっていた。そのうしろめたさも加わり，インタビューを通して黒川先生から「あなたは自分自身に向き合っているか」「専門性についてどう考えているのか」と，問われ続けるような感覚を受けた。その後も，録音データを聞くことすら恥ずかしく，いたたまれない気持ちになったが，論文提出の期限や調査を行った責任から，自分の未熟さに耐えながらまとめる作業を進めていた。

その過程で，黒川先生の「未熟さ・未知なものから目を背けない姿勢」と，「クライエントや若い人の唯一無二の体験を尊ぶ姿勢」が筆者の中で反芻されていた。次第に，調査以前から心の拠り所としていた“「やさしさ」や「情熱」ばかりではなく，一定の「技術」をもっていかに支えることができるか (黒川他, 2005) ”という言葉は，専門的な技術だけを求めるのではなく，心理臨床家の生き方を含むものだと思うようになった。心理臨床の技術に関する知識は，書籍やインターネットで容易に手に入る。しかし，活字や言葉で表現された技術や学びを本当に自分の専門性の糧にするには，先人の生き方を後進が感じ，心に留める過程が不可欠ではないか。この，先人の姿を後進が強烈に心に残す過程では，先人と後進が向かい合って「伝える」「教えていただく」形式よりも，親の背中を見て子が育つように，先人がまっすぐに前を向いて臨床に取り組む姿，ケースを見つめる

姿勢を，後進が敏感に感じ取り何らかの形で取り入れることが求められると考えられる。

謝辞

黒川由紀子先生には，このような形でのインタビューをお引き受けくださり，丁寧にお考えやご経験をお話いただきました。また，実名掲載のご許可とご高閲を賜りましたこと，ここに記して深く感謝いたします。

引用文献

Freed, A. O. (1992). *The changing worlds of older women in Japan.* Manchester: Knowledge, Ideas & Trends.

(フリード, A. O.　黒川由紀子・伊藤淑子・野村豊子 (訳)(1998). 回想法の実際――ライフレビューによる人生の再発見――　誠信書房)

倉永恭子 (2010). 私のスーパーヴァイザー経験を語る――プレイセラピストの養成とスーパーヴィジョン――　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 30-32.

黒田輝政・井上千津子・加瀬裕子・黒川由紀子・古瀬　徹 (1994). 高齢者ケアはチームで――チームアプローチのつくり方・進め方――　ミネルヴァ書房

黒川由紀子 (1998). 老いの心理臨床――高齢者のこころのケアのために――　日本評論社

黒川由紀子 (2002). 老人病院――青梅慶友病院のこころとからだのトータルケア――　昭和堂

黒川由紀子 (2005). 回想法――高齢者の心理療法――　誠信書房

黒川由紀子 (2008). 認知症と回想法　金剛出版

黒川由紀子・斎藤正彦・松田　修 (2005). 老年臨床心理学――老いの心に寄りそう技術――　有斐閣

田中千穂子 (2002). 心理臨床への手びき――初心者の問いに答える――　東京大学出版会

やまだようこ (2000). 人生を物語る――生成のライフストーリー――　ミネルヴァ書房

やまだようこ (2012). 世代をむすぶ――生成と継承　やまだようこ著作集第 10 巻――　新曜社